



国民の森林・国有林

中部森林管理局

〒380-8575長野市大字栗田715-5

☎050-3160-6513

<http://rinya.maff.go.jp/chubu/>

広報

中部の森林



伐採・造林一貫作業システム説明会の様子(東信署)

～林業の低コスト化に向けて～

東信地方で初めての伐採・造林一貫作業システム説明会の開催

主な項目	○ 国有林モニター会議 (現地見学)	P 2
	○ 各地からのたより	P 6
	○ 寄稿 森林鉄道の終わる頃	P 7
	○ シリーズ「森林官からの便り」	P 8
	○ シリーズ「ご当地自慢」	P 10

国有林モニター会議
(現地見学)

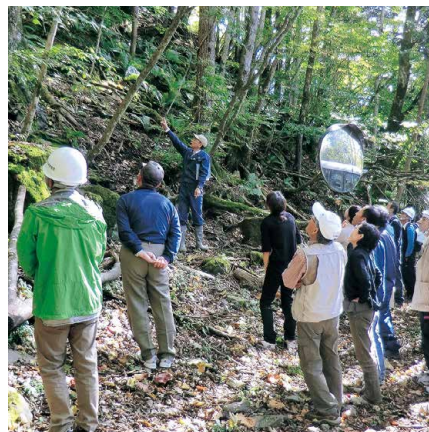
「企画調整課」十月八日、東侯国有林外(南信森林管理署管内)において、国有林モニター会議(現地見学)を開催しました。

現地見学は、東侯国有林(一一二六林班)において、田中南信署長から歓迎の挨拶を受けた後、松嶋森林技術指導官から南信署管内のシカ被害状況、対策、成果、職員による捕獲の方法、平成二十六年度中央アルプス地域での新たな取組等について説明があり、場所を林内に移動して「笠松式ワナ」の実演及び「囲いワナ」によるニホンジカ捕獲調査事業の概要等について説明が行われました。



ニホンジカ被害対策の説明を受ける皆さん

次に、「木の文化を支える森づくり」制度に基づき南信森林管理署と「御柱の



御柱候補木の説明の様子

森づくり協議会」との間で協定を結んでいる「御柱の森」(一一三七林班)に移動し、平成二十八年諏訪大社御柱祭の御柱候補木を前にして南信森林管理署長から協議会の取組内容、候補木選定の経過等の説明が行われました。

その後、御柱祭の「木落とし坂」、諏訪大社春宮社殿の四隅に立てた「御柱」の見学を行いました。

今回の現地見学会では、国有林モニターの皆様から「シカ対策が如何に大変なのか分かりました。」「シカ対策は駆



木落とし坂を見学する様子

除が大切」「シカ肉の『ジビエ』料理への活用を図ることが必要」「御柱は親から子、子から孫に伝わる伝統行事であり継続が必要」といった感想が出されました。

中部森林管理局では、今回の国有林モニター会議(現地見学)でいただいた貴重なご意見を、これからの国有林野の管理経営に活かしてまいりたいと考えています。

第二回中部地区広域原木流通協議会

「名古屋事務所」十一月七日、TKPガーデンシティ名古屋新幹線口において、第二回中部地区広域原木流通協議会(会長(株)東海木材相互市場 代表取締役鈴木和雄)が開催されました。

協議会は、林野庁が国産材の安定的・効率的な供給体制の構築を図るため、平成二十五年補正予算において広域流通体制確立対策事業の公募を行い、(一財)日本木材総合情報センター(代表)、全国素材生産協同組合連合会、全国森林組合連合会、(一社)全日本木材市場連盟の四者を補助事業者(共同実施)に認定し、全国を八ブロックに分けて進められてきたもので、五月二十二日の第一回に続き、今回で二回目となります。

今回も学識経験者として鹿児島大学農学部遠藤日雄教授をはじめ、林野庁、中部局、県(長野・静岡・岐阜・愛知・新

潟・富山・石川・福井県の八県)、各県の森林組合、林産・素材生産事業者・市場関係者、マスコミ各社等約四十数名が参加しました。



会議の様子

今回の協議会では、「中部地区広域原木流通協議会規約」が承認され、同規約第七条により、役員の選任が行われました。その後、鹿児島大学遠藤教授を座長とし、この間、補助事業者が取りまとめた「中部地区広域原木流通構想(案)」について検討が行われました。各県からは、特記すべき内容の追加、修正意見等について、意見が多く出され、これらの意見が今後、報告書に反映されることとなります。

次に、平成二十六年度の事業計画についても承認され、年二回の原木需給情報交換会議の開催、原木の共通規格による採材、仕分け基準の策定と講習会の実

施、原木安定供給研修の開催等が進められることとなります。

質疑応答では、今後、山側の供給体制の確保（集荷方法、雇用の確保など）、バイオマスの動き、木材の海外輸出、オリンピック・パラリンピック関連の木材需要の動き、為替の動向等について活発な意見交換が行われ、引き続き目的を達成するために活動等を行っていくことが確認されました。

林政記者クラブ 国有林等視察

【総務課】十一月六日～七日の両日、林政記者クラブ（中部森林管理局管内加盟社）の国有林等視察を実施しました。

林政記者クラブ四社から四名が参加され、森林管理局からは次長、総務企画部長、名古屋事務所副所長、広報主任官が同行しました。

一日目は、東濃署会議室において、山元次長の挨拶、間島署長による東濃署の事業の取組等の説明がされました。

午後からは、加子母裏木曾国有林内の木曾ヒノキ備林を署長、小林主任森林整備官、小幡地域技術官の案内により視察を行いました。

一行は、裏木曾古事の森を通りながら、ヒノキとサワラが上下に合体して密着成長し、年輪が一つになった非常に珍しい合体木を見学しました。この合体木は、岐阜県の名木にも指定されており、



合体木を説明する間島東濃署長

樹齢は推定五百六十年、樹高三五メートルにもなります。

次に、第六十二回神宮式年遷宮により、平成十七年六月に執り行われた御用材採会場地を視察しました。

御用材伐採式とは、御神体を納める器となる「御樋代」用材を伐採する祭儀のことです。林道からしばらく歩道を登って行くと目の前に大きなヒノキの切り株が現れます。このヒノキの伐採には、伐倒方向が正確で芯抜け突き割れが少なく、古くから貴重材の伐倒に用いられてきた「三ッ緒伐り」と呼ばれている、斧を使用した古式法により行われたとの説明を受け、皆さん感心していました。伐採会場地を後にした一行は、遊歩道を

散策しながら二代目大ヒノキの視察に向かいました。この二代目大ヒノキは、初代大ヒノキが昭和九年の室戸台風により被害を受けたことから、急峻な山中を捜し歩きようやく昭和五十六年に発見されたものです。



二代目大ヒノキを視察

大ヒノキは威厳と風格を備えており、樹齢は推定千年、樹高二六メートル、胸高直径一五四センチメートルにおよびます。

二代目大ヒノキを後にして、裏木曾古事の森で説明を受けた後、高時谷（五色沢）復旧治山工事現場を視察し、急峻な箇所です。続いて、初代大ヒノキの年輪板が奉納されている護山神社を視察しました。

二日目は、岐阜署管内の高天良国有林で森林技術・支援センターと岐阜署が共同で実施しているコンテナ苗の植栽試験地を森林岐阜署長らの案内により視察しました。中部森林管理局では、伐採から造林までの一貫契約を行い、主伐後の再造林の低コスト化に向けた取組を行っています。当日は、森林技術・支援センターの三村森林技術普及専門官、岐阜署の柴山森林技術指導官からコンテナ苗についての説明を受けました。植栽が容易で活着も良い等の特徴を持つことから今後、施業の低コスト化が期待されています。説明を受けた後、准フォレスト連携会議の参加者によるコンテナ苗の植栽を視察しました。



コンテナ苗の説明を聞く記者の皆さん

続いて、七宗国有林に移動し、岐阜署影山総括地域林政調整官らから二ホンジカ被害対策で実施している、くくり畝の

設置、移動式及び固定式の囲い罫の説明などが行われ被害対策の重要性や野生動物との共存の難しさを認識されたようでした。

最後に、岐阜県瑞穂市で県内では初となる間伐材等未利用木材を主な燃料とする木質バイオマス発電所を視察しました。

全体計画では、燃料として年間約九万立方メートル（未利用木材約六万立方メートル、一般木材約三万立方メートル）の木材が必要になるとの説明がありました。

本視察を通し、中部局が地域に貢献しながら事業に取り組んでいる等のPRができたのではと考えています。各視察箇所、林政記者クラブの皆さんから多くの質問もいただき有意義な視察となりました。

今後このような機会を設け、中部森林管理局の取組について効果的に情報発信に努めていきたいと考えています。

准フォレスター連携会議

「技術普及課、岐阜署、森林技術・支援センター」十一月六日～七日にかけ岐阜県下呂市で准フォレスター連携会議を開催しました。この会議は、准フォレスター研修修了生等が一堂に会し、森林施業プランナーとの意見交換やコンテナ苗植栽などの知見を深めることを通じ今後

の活動に生かすことを目的に開催したものです。会議には、中部ブロック准フォレスター研修を受講した者など八県の民有林関係者十六名、中部森林管理局職員二十五名が参加しました。

一日目の全体会議では、フォレスターとして活動を進めていく際、森林施業プランナーとの連携が重要であることから、岐阜県西南濃森林組合の高木啓晶業務係長と公益社団法人岐阜県森林公社の坂本仁技術主査の二名にプランナーとしての活動報告や参加者から事前に聞き取った質問事項などについて回答していただく形で意見交換を行いました。

フォレスターに望むこととしては地域の調整役になっていただきたい、地域のプランナーとの座談会を開くなど意見交換の場を作ってみてはどうかといった提案をいただきました。

その後、(独)森林総合研究所林木育種センターの藤原優理原種係長から「林業用種苗の生産と配布」と題し林業用種苗生産の現状や林業用種苗に関する制度等について講義をしていただき、エリートツリーの開発見通しなど育種体系の基礎を学ぶことができ大変有益なものとなりました。

二日目は、岐阜森林管理署管内高天良国有林において、井上森林技術・支援センター所長らによるヒノキコンテナ苗や専用植栽器具などの説明の後、コンテナ苗約三百本を、いろいろな専用器具で試

しながら植栽を行いました。今後コンテナ苗を推進していく上で実際に植栽体験ができたことは有意義であり、器具の違いで植栽工程が違うことや注意点の理解できたとの声がありました。

その後、七宗国有林においてニホンジカ被害対策として設置した囲いワナについて岐阜森林管理署の影山総括地域林政調整官から、また、くくり罫について七宗町猟友会長谷部副会長から設置の際の注意点等を聞き、シカ対策が待たなしの状況であることを認識した、他地域での取組事例は新たな知見が得られ参考になったといった意見がありました。

二日間を通じ参加した者の情報交換、技術・知識の共有の良い機会となり、次回開催を望む声もあることから、各県職員、国有林職員双方の弱点を補完できる



コンテナ苗植栽現場での集合写真

ようなメニューなどを検討し、フォローアップ、連携の取組を進めていく予定です。



囲いワナの概要説明

「地域と共に」

熱田区民祭りに出展!

「名古屋事務所」十月十二日に「熱田区民まつり(主催 熱田区民まつり実行委員会)」が中部森林管理局名古屋事務所に隣接する白鳥公園において開催され、名古屋事務所からも参加しました。

今年、「街道が、ひとが、まちが、つなげる 熱田」をテーマに歴史文化の魅力を発信するため、街道宿場市として、東は岡崎宿、西は桑名宿、北は下呂、加子母、木曾(広域連合)など八つの宿場町(地域)からも参加され、楽し

さおいしさあふれる賑やかなブース、お獅子の練り歩きや、和太鼓の音が響くステージイベントなど盛りだくさんに催され、当日は台風十九号の接近が危ぶまれる中でしたが、その影響もなく多くの市民が訪れました。

名古屋事務所では毎年ブースを出展しており、地域と共に歩む「国有林」の顔として、区民祭りを盛り上げてきました。今年も「木とのふれあい」として「サクラの枝を使ったストラップづくり」のコーナーを開設し、少ない職員ながら慌ただしく対応しました。



ストラップづくりに夢中の参加者

ブースでは待ち時間が出るほどの盛況で、子供から大人まで総勢二百人近くがストラップづくりに参加しました。参加者らは、完成品の成果に一喜一憂しながらも「ありがとう」、「楽しかった。」などの声が聞かれ、森林とのふれあいを堪能しているようでした。

今後も国有林の川下の窓口として、地域とのつながりを大切に川上と川下との連携や木材消費地での情報発信に努めてまいります。

実践研修

「森林技術・支援センター」平成二十六年実践研修（中部ブロック研修）を十月十五日～十七日までの三日間、下呂温泉旅館会館及び岐阜署管内の神割国有林ほかをフィールドに実施しました。

この研修は、森林総合監理士（フォレスト）活動を実践していく上で必要な知識・技術を補強し、若手技術者のレベルアップを図ることを目的として行うもので、中部ブロックでは「急傾斜地における間伐実行方法と有利販売に向けた採材・木材流通」をテーマに、中部地方な



架線系集材区域の遠望による作業システムの検討の様子

ど九県から県、市町村、国有林の職員の内三十六名が受講しました。

地形条件や出材量、機械の保有状況等に依じた架線系システムに関する知識・技術が不足していると言われていたことから、研修では車輛系で対応できない急傾斜地の間伐の実施方法や、ニーズを踏まえた採材方法等について実践的な指導・助言ができるよう、国有林の間伐事業地、中間土場、木材市場において意見交換を実施し、知識・技術の習得に取り組んでいただきました。

受講者の皆さんには、今回の研修で得られた知識・見聞された事例を各地域での森林総合監理士（フォレスト）活動に活かしていくことが期待されることです。

ESDユネスコ世界会議 併催イベント

「名古屋事務所」ESDユネスコ世界会議が十一月十日～十二日の間、名古屋市「国際会議場」で開催されました。

開会会合には皇太子ご夫妻も出席され、世界百カ国、約千人以上が参加し、地球の未来を担う子ども達の教育について様々な分野から議論が重ねられました。

十一日には、（公社）国土緑化推進機構が主催する併催イベント「企業・NPOと学校・地域をつなぐESDフォーラム」のワークショップが、名古屋事務所

の「林業の歴史と木材利用展示室」において開催されました。

ワークショップでは、前日に実施されたエクスカージョンで学んだことをどのように応用するか、各地でESDを推進するための課題などについて報告された。また、社会貢献活動でESDに取組む企業・NPOから活動報告され、その後「場・プログラム」「人材」「資金」「体制」「評価」をテーマに、NPO法人国際理解教育センター理事代表の角田尚子氏が議事進行を務め、グループ会議が進められました。



グループ会議の様子(発表)

参加者は府県の普及担当職員のほか森林環境教育を積極的に進める企業やNPO団体などで、北は秋田県から南は高知、福岡県まで幅広い地域から二十八名が参加し、各テーマの課題に対して個々の経験や考えを出し合い、取りまとめら

れ発表されました。

取りまとめの中で角田氏は「カラダに染みついてしまったものを変えなくてはいけない。まずは大人が、どうやって変えるかが最大の課題」と話されました。

※ESD (Education for Sustainable Development) とは、経済活動や開発を自然環境と調和させ、住みよい地球を次世代に残すための活動や教育を意味し気候変動やエネルギー、貧困など幅広い課題を含んでいます。

各地からのたより

伐採・造林一貫作業システム

作業システムの説明会

〔東信署〕十一月二十六日、東信森林管理署と長野県林業センターの共催で「伐採・造林一貫作業システム」の説明会を行いました。

林業の低コスト化に向け、東信地方では初めての取組として、高性能林業機械を使用して枝条を整理し、すぐにカラマツコンテナ苗を植栽する一貫作業システムを実施し、また、攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業の「コンテナ苗を利用した低コスト再造林技術の実証研究」として、林業センターをはじめとする試験研究機関により、コスト分析等の調査を行いました。

説明会には、上小・佐久地方の林業事業体や林業関係者等約七十名が参加し、午前中は、浅間山国有林で作業システム



埼玉式ニホンジカ防護ネット設置の様子

の説明、コンテナ苗の植付道具や植栽方法の説明後、埼玉式と林業センター式のニホンジカ防護ネットの設置状況を視察しました。

午後は、会場を室内へ移動し、林野庁、森林総合研究所、林業センター、信州大学の担当者から全国の一貫システムの動向、実証研究の状況や今回の調査結果、当地域での留意点等について、またコンテナ苗生産者の立場として長野県山林種苗共同組合から育苗の現況が説明されました。

その後、中村森林整備部長の進行で討論が行われ、林業事業体から多くの質問・意見が出され、熱心に意見交換が行われました。

この新しいシステムに対する関心は高く、東信地方において「伐採・造林一貫作業システム」についての理解を深める説明会となりました。

「ご神木の里で木曾ヒノキの文化と歴史を語ろまいか」が開催されました。

〔東濃署〕十月十八日～十九日、中津川市付知・加子母地区において、木曾ヒノキ備林や地域の木造施設等の見学会「ご神木の里で木曾ヒノキの文化と歴史を語ろまいか」が開催され、地元岐阜県や愛知、三重、遠方は東京から応募した十一名の方が参加しました。木曾ヒノキをはじめ古くから森林や木材との関わりの中で育まれてきたこの地域の歴史や文化を多くの人たちに知ってもらおうと、地元関係者で組織された裏木曾古事の森育成協議会が主催し、今年で二回目となります(共催：東濃森林管理署)。

一日目は、東濃署での開会式のあと、木曾全山の総鎮守である護山神社で、宮司より御由緒を聞き、中津川市指定天然記念物の「井出之小路の木曾大ヒノキの標本」(初代大ヒノキ)を見学しました。樹齢九百五十年、直径二・三八メートル、九五センチという大きさに参加者の皆さんから感嘆の声が上がりました。次に、江戸時代に尾張藩から裏木曾三か村(加子母、付知、川上)の山守を任された内木家を訪問し、二十代目ご当主から当時の山守の仕事について話を伺いました。カヤの大木がそびえる表門をくぐり、江戸時代から続く母屋のいろりを囲んで会話が弾みました。その後、森林組合の木材



いろりを囲んで裏木曾三か村の山守の話を聞く参加者の皆さん

市場、古刹「宗敦寺」、その本堂の新築を請け負った宮大工工房、木曾ヒノキを用いた神棚の製造工場、御嶽参りの街道として賑わった王滝新道の起点「辻堂」を巡り、この地域の文化や匠の技をご紹介します。また、夕食後は、地元郷土史家ら三名が「裏木曾地域と御杣山の歴史」「三つ緒伐りの伝統を守る」「木曾ヒノキと歴史的建造物」について話題を提供し、アルコールも交えて夜遅くまで参加者と地元関係者の温かい交流が続きました。

二日目は、加子母裏木曾国有林内の木曾ヒノキ備林を東濃署職員がご案内し、平成十七年に行われた伊勢神宮の御用材(ご神木)伐採式跡地、珍しいヒノキとサワラの合体木、初代大ヒノキの後継木で裏木曾のシンボルである二代目大ヒノキなどを見学いただきました。参加者の皆さんからは、「天気もよく

楽しいツアーで嬉しかった。また、スタッフさんのもてなしが良かった。」
 「めったに行けない場所を見に行けて凄く良かった。死ぬまでに一度大ヒノキが見たかったので大変嬉しかった。ここは観光資源が沢山ある場所なので羨ましいです。」「見学する場所での説明が丁寧でとても分かりやすく良かった。今後、こういう良いツアーを着地型観光に結び付けていけると良いですね。」などの感想が聞かれました。



二代目大ヒノキの前で記念写真

主催者の三浦八郎・協議会会長は、「この見学会は参加者の皆さんから好評をいただき、地元の価値を見直す機会にもなっており、これからも継続して、地域づくりにつなげたい。」と語っておられました。

東濃署としても、こうした地域の歴史や文化を伝える取組に積極的に参加していきたいと考えています。

岐阜労働局新任労働基準監督官の 実地訓練受け入れ

【岐阜署】岐阜労働局から新任の労働基準監督官の実地訓練として林業の現地を勉強させてほしいとの協力依頼があり、十一月二十日、七名の訓練生を受け入れました。

最初に森林技術・支援センターにおいて、三村森林技術普及専門官が、伐倒の方法・かかり木処理・集材機集材について模型を使った説明を行いました。訓練生からは、安全なかかり木処理や集材装置の動き等について活発な質問がありました。



森林技術・支援センターで説明を聞く訓練生

その後、場所を門坂国有林に移し、チェーンソーによる伐倒、ハーベスタによる伐倒・枝払い・造材の見学を通じ路網

による作業システム等について学んでいただきました。

説明の一部を、岐阜署の平成二十六年度採用者が行うなど、当方の人材育成にもつながりました。帰りには、カモシカの見送りを受け、大変有意義な訓練であったとの感想もいただいています。



現地で説明を受ける様子

今後、労働基準監督官として全国で立派に活躍される一助になれたのではないかと考えています。

付知中学校生徒林業体験

【東濃署】十月二十二日～二十四日、津川市加子母裏木曾国有林等において、付知中学校二年生二名を受け入れ職場体験を実施しました。

間伐現場での検知や測量、立木調査を

実施したり、土木業務で使用する測量器械の取扱いを学びました。国有林の中で行われている復旧治山の現場では、工事方法の説明を受けたほか安全帯をつけて斜面の吊下がりを経験しました。

生徒たちは、「工事現場では実際に実施している人と同じ姿勢に成って初めて気持ちがあわかった。」「間伐は迫力があつてすごかった。」「何事にも真剣に取り組むことを学んだ。」と体験の感想を述べてくれました。東濃森林管理署としてもこのような機会を捉え、地域の取組に積極的に参加していきたいと考えています。



職員から署の業務について説明を受ける生徒

寄稿

かつて木曾ヒノキや天然広葉樹を運材し、地域住民に愛され続けてきた森林鉄

道に関する思い出や楽しい出来事などを、OBの皆様から、ご寄稿いただきました。国有林の歴史を示す貴重な財産としてここに掲載させていただきます。

森林鉄道の終わる頃

元高山営林署 古川 精次氏

新城営林署が管理する段戸国有林は、面積およそ六千餘、スギ、ヒノキの人工林で一〇程モミ、ツガの天然林を学術参考として残してありました。

入山は飯田線本長篠駅で、私鉄田口鉄道に乗換え鳳来寺、田峰駅などを経、終点田口駅を利用、田峰、田口駅からは林鉄の世話になり、先は徒歩でした。「山は歩いて観察せよ。」とよく云われました。

田峰から三都橋、団子島、鰻沢までの林鉄を管理している豊邦担当区団子島事業所に勤務したのは、昭和二十八年から三十一年の三年三ヶ月でした。事業所は、田峰から十三キロメートル、枋洞支線の分岐点、北設楽郡段領村豊邦にあり、笠井



団子島13km地点 枋洞支線分岐

島、団子島、桑平の集落があつて林鉄は集落の中を通つておりました。集落には小中併設の学校があり、三十戸足らずの交通不便な山間です。人々は歩くことは気にせず当然なことと諦めていた様です。

林鉄は、人々の生活と深く係わりをもつ存在であつたと思います。

この地方では、伐倒・玉切・剥皮し任意の場所へ集積(りん積)までが柚の仕事で、木材の乾燥をまつて、木馬、木寄などの手法で林鉄まで出し、田峰土場へ運搬、極積し販売されており、鉄道の貨車で消費地へ運ばれていました。



伐採現場(りん積)

林鉄のトコは掘田式ブレーキで乗り下り、三都橋から田峰工場まで機関車で牽引しておりました。満載の木材の上でブレーキのロープを捌きながら、レールの軋む音を残しカーブで見えなくなるトコの無事を願つたものです。

幌つきエンジン搭載の自動トコが配置され便利になったのもこの頃でした。事業所は、車輛運行の調整役を担つて

おり、調整頻度も多くなつてきました。

無断でトコを乗り下げる不屈き者もあり、かなり緊張する毎日でした。夜中に火傷の人や病人、助産婦の迎えなど急を要する要請にも何度か応えてきました。

地域との係わり、職務との兼ね合いに悩みましたが、十三キロメートル歩いて逢いに来てくれた彼女の勇氣に感激、励まされました。

昭和三十一年春結婚荷物、秋の転勤引越し等、林鉄の世話になりました。その林鉄も車道工事の土砂運搬を最後に役割を終えました。

古川営林署担当区主任に赴任し、最初の仕事が軌道敷下げでした。引越十三回つきあつてくれた女房との第一歩が森林鉄道の終わる頃で、感無量です。



「木曾署 藪原森林事務所」

首席森林官 野尻 靖

藪原森林事務所は、長野県木曾郡木祖村に所在し、約七九〇〇餘の国有林野を管理しています。

木祖村は、木曾川「源流の里」として、森林の機能を発揮し、多くの国民に親しまれています。

木曾川下流域の愛知県日進市やNPOには、下流の水は上流の森林の恩恵であるとの格別なご理解をいただき、毎年、



鉢盛山

分収造林(平成日進の森林)や村有林等において、関係者・一般市民等合同で森林整備をして、上流・下流の交流による絆を深めています。

「鉢盛山」(標高二、四四六メートル)は、松本市、朝日村と境をなし、太平洋と日本海の分水嶺で、木祖村側は、木曾川の源頭部となつており、鉢盛山コマツガ等林木遺伝資源保存林に指定され、貴重な自然環境が保全されています。山頂の少し北の地点からは、穂高連峰、御嶽、乗鞍、浅間山、松本平などを眺望することができます。

木曾川源流部にあたる「水木沢天然林」は、木曾ヒノキ・サワラ・ネズコの中にブナが生育している貴重な森林で、郷土の森として、木祖村と協定を締結し、歩道が整備され、入林者を楽しませています。赤沢自然休養林とはひと味違う趣があるので、是非訪れてください。木材生産、森林整備は、人工林ヒノ



水木沢天然林源頭部(筆者は右から二人目)

キ、カラマツが中心ですが、木祖村の人工林の約六割をカラマツが占め、なかなか間伐等森林整備が進まなかったところ、今年締結された「木曾谷流域森林整備推進協定」に基づき、藪原土場の一部を木曾官材市売共同組合に貸付し、民有林材も受入れ、流通することができるようになり、民国連携した木材利用及び森林整備の活性化に期待がかかっています(8月号P8参照)。

管内の森林をみると、ヘリ集材の活用にもみられるように、林道に近い好条件で搬出することができる林分が非常に少なくなってきたっており、今後の木材生産と森林整備をより計画的、低コストで効率化するため、いろいろなアイデアを出しながら総合的に実施していくことが要求されていると考えます。本数調整伐の対象



藪原土場の様子



ヘリコプター集材の様子

林分にも良質なミズメやウグイスカンパなどの有用広葉樹も数多く生育しており、すべて植栽木を優先させるのではなく、常に需要や市況の情報を把握しながら、木材利用の活性化と健全な森林を造るため、将来的な視野で森林を育成させなければならぬと感じています。

森林レクリエーションについては、「やぶはら高原スキー場」の一部に国有林野が活用されており、北斜面の良質なパウダースノーと変化のあるゲレンデで



やぶはら高原スキー場

人気があります。皆様のご利用をお待ちしています。

木祖村は、とにかく行事・イベントが多いところで、人が温かく、活力みなぎるところです。情報交換や交流を通じて局管内にもよくみられる酒席森林官と化しています。なお、倫理規程に抵触する行為はしていませんのでご安心を(笑)。

当森林事務所職員は、森林官、係員(将来の長官)、森林技術員三名(現場の経緯・状況、村内の歴史等頼りになります)。計五名で、「どんなに多忙・困難な場面でも楽しくやろう」をモットーに健康と安全第一で明るく業務に取り組んでいます。これからも笑顔で楽しみながら国有林及び地域に貢献してまいりたいと考えています。

人のうごき

中部森林管理局人事

十一月三十日付

▽休職(木曾署森林技術員)

(平成二十七年一月四日まで更新)

▽休職(木曾署森林技術員)

(平成二十七年一月二十日まで更新)

▽休職(南木曾支署森林技術員)

牛丸 政治

▽休職(南木曾支署森林技術員)

(平成二十七年二月十三日まで更新)

下林 浩二

行事・会議等の予定

◎森林管理局事業担当課長会議

1月22日～23日 林野庁

◎中部森林技術交流発表会

1月28日～29日 中部局

お悔やみ申し上げます

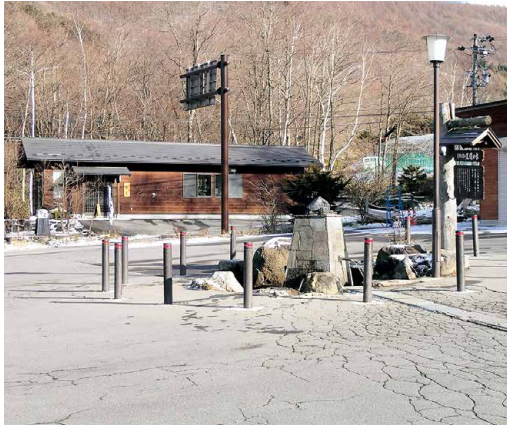
故 安原 清文氏

木曾署 藪原森林事務所 森林技術員

森林技術員 安原清文氏(五十八歳)は十二月六日に、ご逝去されました。

安原氏は、王滝営林署、木曾森林管理署に勤務され、活躍されてきました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。



黒曜の水(水場)

長和町は長野県の中東部、小県郡の南部に位置し、平成十七年十月に長門町と和田村が合併して誕生し、町名は両町村の頭文字より命名されました。

◆豊富な水の町

町内和田地区の旧中山道沿いには、湧き水を中心とした水呑場が、みどころとして各地に設置され、気軽に美味しい水を飲むことができ、水明の里といわれるほど四季を通じて豊かな水に恵まれています。なかでも中山道の難所であった和田峠周辺は、黒曜石の産地として全国的にも有名ですが、ここから湧出する水は



「黒曜の水」と名付けられています。

地元では、和田峠の黒曜の水は、超軟水で腐らない水として、昔から水道水源として利用されてきました。水場は新和田トンネル料金所近くに設けられていますが、遠方からも黒曜石により濾過された名水を求め多くの方が汲みに訪れています。

◆鷹山(たかやま) 遺跡群

大門川支流の鷹山川上流の盆地状の地形にいくつかの旧石器時代の遺跡が点在しており、これらを総称して鷹山遺跡群と呼んでいます。



ブランシュたかやまスキー場から星糞峠を望む

この遺跡は、地元研究者であった児玉司農武氏(同町大門出身)により発見され、黒曜石原産地における旧石器時代の活動の痕跡が次第に知られることとなりました。

また、一九九〇年代になって、近くの星糞(ほしくそ)峠一帯で縄文時代の黒曜石の採掘跡が確認され、星糞峠黒曜石原産地遺跡(国史跡)として現在も研究が進められています。

黒曜石や遺跡に興味のある方、石器作りを体験したい方は鷹山地籍に黒曜石体験ミュージアムがありますので、一度訪れてみてはいかがでしょうか。

◆長久保宿と本陣(町指定文化財)

長久保宿は慶長七年の中山道制定に伴い真田氏の支配下により宿場が形成されました。寛永八年の大洪水により、宿場を現在の地へ移し、本陣・問屋を中心に東西方向に「縦(たて)町」が、宿が賑わうにつれて「横町」が形成され特異なL字型の町並みとなりました。

一時は四十軒前後の旅籠屋が軒を連ね、中山道信濃二十六宿の中では塩尻宿に次ぐ規模であったとされています。

この長久保宿にある本陣は真田幸村(二〇一六年大河ドラマ「真田丸」の主



長久保宿本陣

人公)の娘が嫁いだとされる石合家が勤め、現存する遺構は御殿と表門があり、御殿は十七世紀後半の構築と推定され中山道中では、最古の本陣遺構といわれています。

◆公共建築物への地域材利用

町は積極的に長和町の自然の中で育った地域産の木材利用に取り組んでおり、本年十月に竣工した長和町の統合保育園(ながと保育園)は「自然の懐に抱かれ、太陽の恵み、風の流れ、木々のぬくもりを感じ…」との設計コンセプトにより地元カラマツをふんだんに使用して建設されました。



ながと保育園園舎と絵本広場(左)

構造材の約七割は、町産材であり、高齢級の国有林材は要所に柱材として活用されました。

現在、町では役場庁舎の新築に着手しており、引き続き地域産の木材利用を進めるなど歴史に息づいたふるさと創りに取り組んでいます。